

心理調査士の可能性

1. 新しい資格？

現在、常務理事会で検討していることの一つに、日本心理学会認定資格「心理調査士」があります。これまで、何度か理事会や各種委員会の先生方にお話をする中で好感触を得ましたので、今期の学会の課題として取り組んでいます。

2. 職能資格としての心理調査士

人の行動・思考・感情を理解するのが心理学の目的であることは誰にも異論がないと思います。それを支える技法のいくつかを心理調査士に組み込んでいきます。

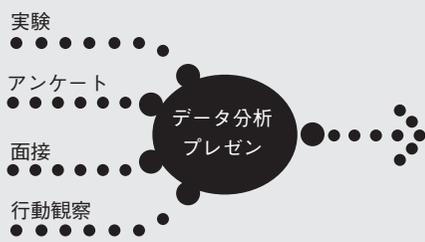
心理調査士では大きく、実験、アンケート、面接（インタビュー）、観察（フィールドワーク）の力をつけた人に対して資格を認める、ということになるでしょう。社会調査が社会について知るための調査であるのとは異なり、個人の嗜好・態度などを調査するのが心理調査、だといえるかもしれません。

また、データ分析とプレゼンテーションの技能はもとより、研究倫理についても一定の識見を持つことを求めたいと思っています。さらには、人を管理するための調査ではなく、個人の自由と尊厳を拡大する（エンパワーする）のが心理調査だと思われれます。

3. 心理調査士のカリキュラム

さて、現在、日本心理学会では、認定心理士という資格を提供しています。この資格は、心理学の基礎カリキュラムを履修したことを認める資格です。これに対して、新しい心理調査士の資格は、心理学の知識をもとに調査ができることを認める職能資格であることをめざします。この資格は一定のカリキュラム（総単位数は18単位程度）を修めることを要件にするこ

4つの手法を使えるのが
心理調査士（仮称）



とを考えています。

心理調査概論のような基幹となる座学科目に加え、実習科目を履修してもらおうと考えています。これまでに心理学を学んだ方、認定心理士の方に対しては、講習会で必要な内容を学ぶことによって資格取得を可能にするような週と措置も考えています。

なお、心理検査の実施法については、心理調査とは異なるカテゴリーとすべきだと考えており、心理調査の範囲に収めることは—あえて—いたしません。

4. 通貨としての資格

現在、人間（ひと）を対象とする研究・調査に対して倫理を問う声は厳しくなる一方です。研究計画の倫理審査において、「誰が」どのような「資格」でデータを扱うのかが問われる機会も少なくありません。社会心理学の大学教授、などは実験や調査の力量を示すものではありません。

私自身は資格について、知識・技術の修得の証明であり、学問と社会をつなぐツールになりうるものであると考えています。また、資格は通貨（Currency）のようなものだと考えています。それぞれの国の通貨は、その国を一步出ると、交換レートが変動します。その国の力量や経済状況がシビアに査定されるのです。国内だけで威張っていても外では通用しないのが現実だったりします。新しい資格が社会で流通するかどうかは、まさに心理学という学問分野に対する評価そのものとも言えるかもしれません。

若い人たちに目を転じれば、資格とは、自分自身の学びについて自信をもって語るための媒介（ツール）にもなりうるでしょう。心理学を学ぶ学生や院生が、社会と切り結ぶ一つのあり方として、この資格には意味のあることではないでしょうか？ 資格とは、自分がどのような知識・技術を持っているかについてのメタ認知を持つことを可能にし、学範（ディシプリン）アイデンティティを持つことを可能にするものでもあるのです。

この資格については、本年度の日本心理学会（2014年9月；同志社大学にて）でもシンポジウムという形で意見交換をしたいと思っています。カリキュラム案などについても、その場でお示ししたいと思っています。

（教育研究担当常務理事・立命館大学教授 サトウタツヤ）